

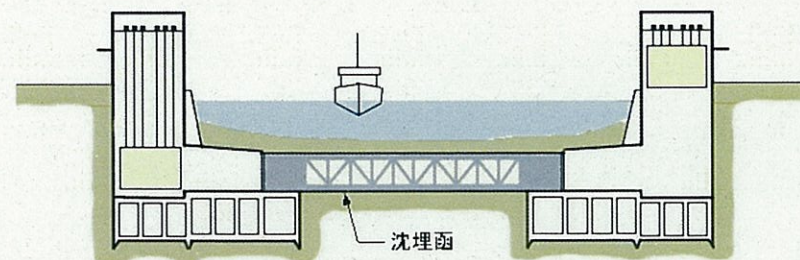
**安治川河底とんねる** は大阪市西部、<sup>あじがわ</sup>安治川の下をくぐる道路トンネルです。安治川は旧淀川の河口部にあたり、古代には日本の表玄関であった難波津（現在の天満橋付近）への主航路として、また近世には天下の台所大阪を支える物資輸送の大動脈として多くの船で賑わいました。さらに明治に入り現在の西区川口付近が国際港として開港され、大阪の工業化が進むとともにこの川を上下する船舶の大型化・高速化が進みました。

一方で大阪の近代化は、陸上交通の需要を増やすことにもなりましたが、大阪港の一部であったこの付近には橋が架けられず、兩岸の連絡は渡し舟に頼るほかありませんでした。さらに大正、昭和と時代が進むにつれて自動車交通の需要が増大し、安治川を横断する道路の必要性が高まってきました。こうした背景から、「源兵衛渡し」と呼ばれる渡船場のあった位置に自動車の通行が可能な河底トンネルが計画されたのです。そして昭和6年から設計にとりかかり、着工したのは昭和10年のことです。

**土木技術の粋を集めた** と言えるのがこのトンネルです。当時わが国ではほとんど例のない河底トンネルであったこと、地盤の悪い大阪の西部に位置すること、そして船舶の航行が激しい場所での施工など、かすかずの悪条件を克服した、当時としては画期的な構造物だったのです。

エレベーターを設ける兩岸の建物の基礎は、圧さく空気で地下水の湧出を防ぎながら掘り下げ、鉄筋コンクリートの箱を沈めてゆく「<sup>あつきせんかん</sup>圧気潜函工法」（写真）を用いたこと、トンネルの主要部分は造船所のドックでつくられた

鉄骨鉄筋コンクリート製の角型チューブ（<sup>ちんまいひん</sup>沈埋函）を船で<sup>えいこう</sup>曳航し、河底に掘られた溝に沈める「沈埋工法」によったこと、そしてその沈埋管の両端を先に沈めた建物の基礎の端部で支える、一種の「橋」のような構造にしたことなどが主な特徴です。このように当時の先端技術を駆使したトンネルが完成したのが昭和19年、日本中が戦争に集中していた時代だったことを考えると、大阪市のまちづくりを語るうえでの象徴的な出来事だったと言えるでしょう。



**現在**、このトンネルは車道の使用を廃止し、歩行者と自転車だけにご利用いただいています。それは、自動車交通量の増加と大型化・高速化という社会情勢の変化に、エレベーターによる通行方式が対応しきれなくなったことと、上流・下流にいくつもの橋が架けられたことが主な理由です。

**身近な市民の足** として利用されている安治川河底とんねる。だれでもが安心して気持ちよく利用していただけるよう管理・運営に努めています。皆さまのご協力をお願いいたします。



通勤、通学、買い物など、たくさんの人々に利用されています。



明るく清潔な通路は、防犯ベルも設置されていて女性や子供たちにも安心です。

